

【付録五】——『現代人間学・人間存在論研究』 第四号のための序

われわれはこれまで、それぞれの形で人間存在の本質について語り、われわれ人間存在がいかなる道程を歩みながらこの時代に到達したのかについて見てきた。

本号では、そうした人間存在を待ち受けている未来、その最果ての世界について見ていくことになる。モノにまみれ、電波に浮遊し、生きることに自己完結するわれわれは、これから先よりいっそう“完璧な世界”をこの惑星に築いていくことだろう。その「ユートピア」においては、脳とAI、身体とデジタル機器、精神と薬物作用の区別はおそらく存在しない。そこでは意のままにならない肉体を捨てた「脳人間」たちが、そして意のままになるロボットしか愛せない自己完結人間たちが、「私こそ真の人間である」と高々に宣言するだろう。自らを取り巻くあらゆるノイズを除去した人間は、こうしてついに完璧な“ニンゲン”となる。それは「イデア」そのもの、あるいは世俗的な「神」そのものとなった人間である。

「現代人間学」は、ここでわれわれに問いかけるだろう。“言葉”はまだ、そこに残されているのかと——われわれを世界や他者と了解させてきた、あの胸を打つ多くの言葉たちは。“意味”はまだ、そこに残されているのかと——生きることの悲しみと残酷さを前に、自らを負って生を成し遂げていくことの意味は。“信頼”はまだ、そこに残されているのかと——人々が素朴な“悪”に立ち向かい、世代を越えて連なることによって築いてきた信頼は。“救い”はまだ、そこに残されているのかと——すべてが実現するかのようであり、決して意のままにならない世界に向き合うことの救いは。そして“美”はまだ、そこに残されているのかと——いかなる世にあっても、おのれの生き方は美しかったのかと問い続けてきた人々の祈りは。

われわれはいつしか、「目に見える」この世界だけが、そのまま世界のすべて

であると思ひ込むようになったのではないか。だが、見よ。どんなに目を凝らし、賢しい物質で時空を埋め尽くそうとも「目に見える」ことどもの間の影^{あわい}には、うねり、ぶつかり、とけあい、まどろみ、無数にうごめく「目に見えぬ」ことどもの海が厳然として、ある。われわれは寄せては返す波の前で今でも存在を揺らがせている。そうやってこの時代の波止場に佇みながら生きることを負っている。「存在の波止場」に立たされた人間は、これからも世界を、歴史を、そして人間が環境に存在することを、見つめ続けていくのだろうか。人間の瀬戸際に居合わせるとき、思想として語らなければならない人間の姿は、波打ち際に踏みとどまる“言葉”を探している。

われわれは本号において、この【第一期】の試みをそれぞれの形で総括する。そして次の課題へと向かっていくことになるだろう。

上柿崇英／増田敬祐

